**～触罪の狂壊姦～**

**爆乳冒険者ロザリー・ロスティカーナ最後の冒険記　体験版**

　･･････ランバース帝国やアデルハイム王国、ベルザニア連合国といった列強の大国と国境を接する都市国家トリギスティリアは、小国なれど、歴とした独立国家として屹立してきた国である。

　トリギスティリアが領域とする国土面積は、東西八六キロメーストル（一キロメーストル、一・五キロメートル）、南北七四キロメーストルと、実はそれなりの広さがあるのだが、二八〇万人いる国民のおよそ九割以上が、最大都市にして首都でもあり国名の由来にもなったトリギスティリアに集中していた。

　古来より交通の要所であったこの都市は、地理的利点を背景として、金融、経済、物流、情報、そして人材の集散地として富み栄えてきた歴史を持つ。流入するありとあらゆる要素が結合し、混ざり合い、融合することで利益と化し、付加価値を伴って流出することで、周辺諸国に多大な利益をもたらすことで存在感を発揮してきたのだった。その影響力の大きさゆえ、大国がその権益を我が物にしようと、トリギスティリアに軍隊を派遣して支配下に置くこともあったが、そのような行動をとった国に対しては、それをよしとしない他の国々が連合して抗議したため、占領はいずれの時代も長くは続かなかった。

　トリギスティリアは近年、諸外国への対外投資を活発化させると共に、各国の王侯貴族を対象とした資産運用にも力を入れており、軍事力ではなく富力と経済力を背景に勢力を増大させている。トリギスティリアに借金をしなければ国政や軍事行動がままならない国もあるほどで、トリギスティリアは、いまでは世界でもっとも金銭が集まる国とさえ言われていた。ゆえにこの国に手を出すことは、ある種の禁忌とされるようになり、トリギスティリアの自治独立は不可侵なものとして諸外国に認知されているのだった。

　話は戻り、国最大の都市にして首都であり国名の由来にもなったトリギスティリアは、連日賑わっており、街は数多の人で溢れかえっている。城門をくぐり、都市最大の大通りに立って周囲を見渡せば、前も、後ろも、右も、左も、どこを見ても人、人、人ばかり。国外から訪れた商人や旅人たちが忙しなく行き交い、主人が商売の交渉をしている傍らで、馬や駱駝や驢馬や騾馬が水場で喉を潤しながら寝そべっている。

表通りに軒を連ねる店々には、カストファル王国の香水、ズールー王国の象牙細工、フェラン公国の楽器、セルン皇国の宝石画など、各国から集まった様々な商品が並んでおり、どの店もたくさんの客で賑わって、威勢のいい客引きの声が絶えない。

他国では珍しい「本」を扱う書店には、様々な種類の書籍がずらりと並んでおり、特に人気の本は未知の大陸に関する記録書「新世界にて」や古代カロン帝国で猛威を振るった「神の軍団」に関する書籍だという。肉、魚、野菜、果物など、各種食材を調理して提供する飲食店の数も多く、肉が焼ける匂いや具のたくさん入ったスープの匂いに誘われて多くの人たちが購入していく。路上では奇術師や曲芸師が大道芸を披露して、技を成功させるたびに喝采を浴びている。路地裏にまわると、怪しげな占い師や薬師が開いている店があり、他国では非合法な品を購入できる店も少なくなかった。

　金髪碧眼のランバース人、褐色肌のシャフール人、長い髭を蓄えたドンイン人、さらには処女雪のように白い肌をした北方のヌイット人など、街中で見かける人種は多種多様さまざまで、まるで人間の見本市のようですらあった。

　そんな行き交う人々のなかに、特殊な格好や武装をした者たちがいる。業物の剣を腰に帯びている剣士、特殊な加工が施された魔法衣を纏った魔術師、さらには魔物の牙で作ったアクセサリーを誇らしげに身につけた野蛮人を彷彿とさせる戦士など、ひと目で只者ではないとわかる気配を醸し出している者たちだ。彼らは選択的自由職業人――いわゆる「冒険者」と呼ばれる者たちである。

　トリギスティリアには、その自由な気風と活気に惹かれて、国家や公的機関に所属することを好まない者たちが集まって活動の拠点としている。騎士や戦士、傭兵、闘士、魔術師や呪術師、癒術師、猛獣使いや虫使い、錬金術師や密偵など、錚々たる肩書きや特殊技能を持つ者たちが、自分の裁量でこなせる仕事や莫大な報酬を求めてこの国にやってくるのだ。この都市には彼ら冒険者たちが集まって結成された同業者組合（いわゆるギルド）が幾つもあって、国内外から寄せられる様々な依頼をこなすことで生計を立てていた。

　冒険者たちへの仕事の依頼は多岐に及ぶ。小さなことでは失せ物の捜索から大きなことでは全面戦争への参加まで――魔物退治、野盗の討伐、要人警護、隊商の護衛、決闘の代理から野草の採取など、実にさまざまな内容の依頼が国内外からもたらされるのだ。一度の依頼で莫大な報酬を得て金持ちになる冒険者もいれば、任務に失敗して人知れず命を落とす者も少なくない。永遠に行方を絶つ者や、死よりも悲惨な目に遭いながら生き残ってしまう者もいる。冒険者は危険な仕事だ。それでも、冒険者になろうとこの国にやってくる人間は絶えることがなかった。

　ちなみに、冒険者たちに仕事を紹介する斡旋所は、表向きは各ギルドが運営していることになっているのだが、その背後にはトリギスティリア政府が控えており、各ギルドからの徴収金を重要な財源にしているのだった。トリギスティリアには関税がなく、また商売や取り引きで得られる利益にも税金がかからないため、ギルドからの徴収金はまことに大事な収入源なのである。

　さて、冒険者の多くは自由と引き換えに安定を犠牲にして刹那的な生き方を選択している者が多いが、むろん、そうでない者もいる。冒険者などという不安定な職業に就きながらも、それを手段と割り切って、別の野望を叶えるための手段として考える者もいるはずであった。

･･････新進気鋭の冒険者ロザリー・ロスティカーナは、本人いわく、今年で二十五歳になったという。自称である。確かに、首から下だけの身体つきを鑑みれば、その年齢も頷けるというものだ。彼女の肉体は、世の男どもが理想とするような豊満な体型をしていて、見た目だけで欲情をそそられる身体つきをしていた。張りがある乳房は、平均水準よりも遥かに大きく、まるで熟れた西瓜のように重々しく胸に実っており、安産型の見本ともいうべきお尻もやはり大きく、むちむちと肉づきがよかった。それでいて全身が引き締まっており、無駄な脂肪というものが一切付着していないのだから、見事という他ない。しかし、首から上の部分――美貌の見本ともいうべき端整な顔には、あきらかな幼さとあどけなさが混在していて、見た目とても若かった。童顔というレベルではなく、幼顔という風でもなく、どう見ても、とても二十代半ばの顔つきには見えないのである。むしろ早熟な十代といわれたほうが万人が納得するであろう。しかし、彼女はなんど年齢について尋ねられても、頑なに二十五歳といってはばからなかったため、彼女を知る者は、あえて深く追求しようとはしなかった。この街には訳ありの人間が数多くいるため、当人が語りたくないことを深く追求することはヤボというものであるからだ。それに、冒険者に必要とされるものは強さや実力であって、容姿の美しさや肉体の豊満さは（場合によっては優先されることもあるが）二の次であった。

　ロザリーがトリギスティリアに現れたのは一年ほど前である。冒険者として仕事を得るため、ギルドのひとつである「炎の蜥蜴」に登録した際に記載した職業は「魔法剣士」で、そのとおり、剣と魔法に精通した実力者だった。

　彼女はひとりで行動することを好み、他人とパーティーを組むことはほとんどしなかったが、それでも挙げた功績は多大だった。

　悪名高いガーズ盗賊団の討伐、危険な魔物が棲息する「暗黒の大地」に赴いての香草の採取、鉱山に巣を作った単眼竜の退治、地中に埋もれた古代遺跡の調査など、本来であればギルド単位で臨むような仕事をひとりで成功させてきたのである。しかもその合間に、賞金が懸かった犯罪者や魔物を、まるで小遣い稼ぎだと言わんばかりのペースで討ち取ったりしているのである。彼女がこの一年で稼いだ金額は、それこそ孫の代まで食うに困らない額だといわれていたが、ロザリーがそのカネを無駄に浪費することはなく、全額トリギスティリア政府が運営する投資銀行に預託して運用しているのであった。

なにか目的があってのことと思われるが、ロザリーがそれを口にしたことはなく、むしろ同業者たちの間で話題になるのは、もっぱら彼女の美貌と豊満な肉体、そして年齢詐称疑惑についてであったから、彼女が多額の金を集めている理由については謎のままであった。

　この日ロザリーは、彼女が所属するギルドが運営する斡旋所を訪れていた。この斡旋所には酒場が併設されており、昼間だというのに何人もの冒険者たちが酔いつぶれてテーブルに突っ伏している。そんな者たちに目もくれず、ロザリーは、長く伸ばした薄桃色の髪をなびかせながら、大きな乳房を揺らしつつ、奥のカウンターでグラスを磨いている無頭髪の男のもとへと向かっていった。この斡旋所の運営を任されている店主である。

　カウンターの一席に腰を下ろしたロザリーは、自分の大きな乳房を、まるで相手に見せつけるようにカウンターの上に乗せながら、店主に向かって声をかけた。

「はぁい、マスター、久しぶりね。景気はどう？」

「久しぶりって、おまえ･･････一〇日前に仕事を紹介したばかりじゃねーか。戦争でも起きないかぎり、そんな数日で景気は変わらねぇよ」

グラスを拭く手を止めることなく店主の男は応じた。カウンターの上で存在感を発揮しているロザリーの爆乳には見向きもしないのは、彼の理性が崇高だからではなく、店主の男が同性愛者だからであった。

「で、今日はなんの用だ――って、聞くまでもないか。また新しい仕事を探しているんだろう？」

「そ、正解。わかってるじゃない。さっすがぁー」

明るい声で言いながら、カウンターの上で指を組み替えた。腕の間で、大きな乳房がさらに強調されるようにムチッと張った。

「危険度は問わないし、どんな依頼でもこなすから、また報酬のいい案件紹介してよ。あるんでしょ？　いい案件」

「そうはいうがな、このギルドには四〇〇人の冒険者が登録してるんだ。おまえさんばっかりにいい仕事をまわしてたら、他の連中からひんしゅくを買うってもんよ。たしかに、おまえさんはズバ抜けて優秀で有能だが、公平と平等と誠実は商売を続けていくうえで重要な要素なんだ。おまえさんばっかりに報酬がいい仕事はまわしてやれないよ」

そう言って、付け加えた。

「それに、おまえさんには先日、高額な案件を紹介したばかりじゃないか。あの一件で、向こう一年は遊んで暮らせるだろうに、なんだってそうすぐに働きたがるのか、俺には理解できねぇなぁ」

店主がいうとおり、ロザリーは数日前、斡旋所の紹介で高額な賞金を懸けられた呪術師を倒したばかりだった。

その呪術師は、北東のヌリタリア王国の王族一〇八名を呪殺したという危険人物で、追手として派遣された騎士団を壊滅させたと言われていた。当初は他のギルドが受けた依頼だったのだが、討伐に赴いた冒険者の七割が殺害されたため、手に負えないと判断されて「炎の蜥蜴」にまわされてきたのである。

　依頼を受けたロザリーは、周囲の忠告を無視してひとりで討伐に赴いた。そして、仲間たちの不安を的中させることなく、三日ほどで呪術師の首を持って帰ってきたのだった。ロザリーいわく、呪術師は彼女の基準で「雑魚」に属する部類だったそうだ。

この一件でロザリーが受け取った報酬はヌリタリア金貨九五〇枚と高額で、堅実に生活すれば五年は安楽に暮らせる額である。普通であれば急いで仕事を探す必要などないはずだ。だがロザリーは、すぐにでもカネになる仕事を欲していたらしい。店主との論戦を意図的に避け、要求のみを突きつけてきた。

「あなたが理解に苦しむ必要はないから、さっさと案件を紹介しなさいよ。それが仕事でしょう？」

「･･････」

「もし仕事を紹介できないっていうんだったら、あたしは別に他のギルドに移籍したってかまわないのよ？　言っちゃあれだけど、あたし、引く手数多だし、いまもいろんなギルドから勧誘きてるしね」

「･･････」

「それに、あたしに任せたほうが速く済むし確実よ？　なんたってこれまでの案件成功率は一〇〇パーセント。依頼が成功すれば評判もあがるし、手数料だってすぐ入ってくるんだから、絶対あたしに任せたほうがいいって。ね？　ね？」

「･･････」

店主の男は話を聞きながら渋い顔をした。ロザリーの主張の正しさを認めずにはいられなかったからだ。

　たしかにロザリーは受けた依頼をすべて成功させているし、それによってギルドの評判と収益があがっているのも事実だ。

　通常、冒険者が受け取る報酬の一割から二割が、経費や手数料としてギルドに納められる。当然、依頼が成功しなければ報酬は支払われないから、依頼の成功率はギルドにとっては死活問題に直結する。質の悪い冒険者しか在籍していないギルドの場合、無収入の期間が長引くどころか、依頼すらこなくなり、場合によってはギルド自体が破産することもあるのだ。ちなみに、ギルド収入の七割は、トリギスティリア政府が様々な理由をつけて徴収していくため、ギルド運営も楽ではないのであった。

「わかったわかった、わかったよ。仕事探してみるから、ちょっとまってろ」

「ありがと。早くしてね」

にこっと笑みをこぼすロザリーとは対照的に、店主のほうは渋い顔をしたまま頭髪のない頭を掻いている。

「――っても、高額な案件はもうないぞぉ。受けてた上級案件はあらかた片付いちまってるしなぁ」

それでもと、カウンターの下から取り出した書類の束をめくってゆく。すでに他の冒険者たちが受注している案件は紹介できないから、ロザリーが望む高額な仕事はおのずと限られてくる。金貨に換算して二、三〇〇枚ていどの案件はまだ残っていたが、この程度ではロザリーは満足できないだろう。

「うーむ、いまある案件のなかで高額な報酬が望めそうなのは、採取に関する案件だな」

「ソレ、なにを採ってくればいいの？　貴重な薬草？　古代文明の遺産？　それとも魔獣の爪牙？　もしかして竜の糞とか？」

ロザリーは冗談めいた口調で言っているが、竜の糞は様々な秘薬の原料として重宝される高価な品だ。ロザリーは使ったことはなかったが、魔術師のなかには精製した粉末を吸引して魔力を向上させる者や、大規模な隊商が香にして魔物除けに活用したりする。竜の糞は常に高値で取り引きされているが、竜はあまり排泄しないうえ入手が難しく、そのうえ紛い物も数多く出回っているため、信頼に足る品質のモノは滅多に市場にはでまわらないことで有名だ。

「いや、違う。この案件はサフィアパールという宝石採取に関する依頼だよ」

「サフィアパール？」

ロザリーは首を傾げながら知識の海を探った。が、彼女がその聞きなれない単語を引き上げるよりも先に、店主の男が話を進めた。

「ときにおまえさん、真珠って宝石は知ってるか？」

「もちろんよ。貝から採れる宝石よね」

「じゃあ、その真珠が作られる過程も知ってるかい？」

ロザリーは答えた。

「貝の内側に異物が入ると、刺激を受けた貝が分泌物をだして異物を包むのよね。それが核になって時間が経つと真珠になるって本に書いてあったわ。違ったかしら？」

「いや、正解だ。そのとおりだよ」

店主は褒めたが、賞品は出なかった。ついでに拍手も。

ロザリーはカウンターの下で足を組み替えた。

「ってことは、その依頼は真珠の採取ってこと？　パールって確か、古代カロン語で「真珠」って意味よね」

「あ、いや、わかりやすく説明するために真珠の話をしただけで、サフィアパールは真珠じゃない。いや、真珠と同じ生体鉱石の一種なんだが、貝が生成する代物じゃないんだ。サフィアパールは、ジュラゲドという粘体性軟生物の魔物が体内で生成する魔石なんだ」

ジュラゲドは、一見すると暗灰色のスライムのような見た目をした魔物だが、その体組織はほどよく硬く、カタツムリやナメクジのように骨や外骨格をもたない剥き身の軟生物である。全長は最大でも一メーストル（一・五メートル）と小さいが、身体から触手や触腕を伸ばして別個体と混じり合い、魔力や栄養を譲り合いながら群れ単位で棲息するため、個々の大きさよりも「コロニー」の大きさで語られることが多い。瘴気が漂う廃墟や魔素が充満する洞窟など、暗く湿った場所を好み、岩壁をゆっくり溶かして得られるミネラル成分を栄養としている。肉食でも草食でもないため、魔物としての危険度はほとんどないが、個体によっては人間が装備する魔力を帯びた武器や防具や繊維を栄養素と認識することがあるため、過去にはまとわりつかれて大事にいたった事故が起こったりしている。が、そのようなケースは稀なことであり、他の魔物による獣害と比較すれば些細なことだ。

「ジュラゲドが生成するサフィアパールはな、その美しさから宝石として非常に高値で取り引きされているんだが、それ以上に、実は「魔薬」として重宝されているんだ」

ひと言で「魔薬」といっても、その種類や効能は様々だ。多大な効果と引き換えに重い副作用をもたらすモノから、使い方次第では毒にも薬にもなる代物まで、原料も、精製方法も、用途も、それこそ星の数ほどある。先に話題になった竜の糞も、精製して粉末にしたものは魔薬と一種として認知されている。

「サフィアパールを飲み込むと、胃酸で溶け切るまでの間、飲食者に魔力を供給し続ける。さらに成分は高栄養で人体に有益でな、飲み込んだ者いわく、細胞の隅々にまで栄養が行き渡るのがわかるほど凄いそうだ。何年か前にランバースの魔法部隊が攻略不可能と言われたアデルハイムのガルガンディア要塞を堕としたことがあったが、件の魔法部隊には、魔薬としてこのサフィアパールが配られてたって話だ」

ガルガンディア要塞陥落の一報は諸国を震撼させ、大陸における軍事的均衡をランバース帝国に大きく傾けるきっかけになった出来事である。この件以降、ランバース帝国は、諸国に対して領土拡大の野心を露にしはじめているのだが、それはまた別の話である。いまはジュラゲドとサフィアパールについてが重要であろう。店主はさらに説明を進めている。

「サフィアパールは宝石としても魔薬としても高値で取り引きされる代物だが、真珠と同じでな、すべてのジュラゲドがサフィアパールを生成するわけじゃなく、しかもジュラゲド自体数が少ない。洞窟や廃墟なんかで数十匹ていどのコロニーが見つかったりするが、そのていどの規模じゃサフィアパールが見つかることは稀だ。というか、まず見つからん。サフィアパールはそれほど貴重な代物なんだよ」

それを聞いてロザリーはあからさまに失望した表情を作った。大きな乳房のうえで、大きなため息を吐いた。

「なによ、それ。じゃあその依頼は、そのジュラゲドって魔物を見つけるところからはじめないといけないわけ？　そんなの、非効率の極みじゃない。パスよ、パス。他の依頼にしてちょうだい」

「そう言わず、まぁ、聞けよ。実は今回の依頼では、すでにジュラゲドの棲息地はわかっているんだ。しかもそこは群生地で、推測で数万匹のジュラゲドが巨大なコロニーを形成しているらしい」

その場所は、ランバース帝国ディリクレア辺境伯領の未開地にあるカロバ洞窟だという。その洞窟には古代カロン文明時代の遺跡があるのだが、その遺跡は、魔力を含んだ頑丈な古代コンクリートで造られているというのだ。どうやらジュラゲドは、その古代コンクリートを餌にして大繁殖したようなのである。それを聞いてロザリーは首を傾げた。

「場所がわかってるならなんでさっさと採りにいかないの？　ディリクレア辺境伯って帝国の重鎮よね。冒険者に頼むより、軍隊を派遣したほうが安上がりで早いんじゃない？　それとも、外部の人間に頼まないといけない理由でもあるわけ？」

「帝国領といっても、カロバの洞窟は、「暗黒の大地」の領域内にあるんだ」

「あ～、なるほど」

ロザリーは納得した。「暗黒の大地」と呼ばれる領域は、かつては人間が支配する土地であったが、訳あっていまでは未開地と化しており、人の力が及ばぬ強力な魔物や未知の生物が数多く生息していて、人の手による再開発を阻んでいるのであった。

　一応、帝国領ということは、カロバ洞窟は人が行ける範囲にはあるのだろうが、暗黒の大地の一部ともなれば相応の実力者は立ち入るのが難しい。生半可に部隊を派遣すれば壊滅するのがオチというものだ。ガルガンディア要塞陥落の一件からして、おそらく帝国は、過去に大部隊を派遣して、サフィアパールの採取には成功しているのだろう。だが、採取に際して、多大な犠牲者が出たに違いない。それこそ、ガルガンディア要塞陥落の快挙が霞んでしまうほどの犠牲者が。ゆえに、外部に情報が洩れてでも冒険者に依頼したほうがマシと考えるようになったのだろう。

　普通の冒険者であれば、暗黒の大地と聞いただけで依頼を断ってしまうだろう。だが、自分の実力に絶対の自信をもっているロザリーにとっては大きな問題ではなかった。彼女が気にしている点は、ズバリ報酬である。

「その依頼、報酬はどれくらいかしら？」

「小粒一個につきランバース金貨で三〇〇枚、大粒だと七〇〇枚だ。ちなみに、個数制限はない。あればあるだけ買い取るそうだ。ちなみに、辺境伯領へ入領するための通行手形もすでに受け取ってある。もちろん、カロバ洞窟までの地図もだ」守秘義務があるから依頼主の素性を探ることはできないが、それほどの報酬を用意できるなら依頼主は個人ではないだろう。依頼主はおそらく、ランバース帝国政府そのものであるに違いない。

　ロザリーは店主に言った。「その依頼、あたしが受けた」

　　　　　＊

　ランバース帝国ディリクレア辺境伯領は、帝国の南東部に位置しており、領域の四割が暗黒の大地によって占められているという。

　いまからおよそ三〇〇〇年ほど昔、いまは暗黒の大地と呼ばれるその場所には、カロンという高度な古代文明が栄えていたと言われている。発掘された遺跡や出土する遺物などを調査したところ、カロンは魔術を極め、いまよりも遥かに優れた技術を有しており、どうやら大帝国として世界を統べていたようだ。だが、文明の絶頂期、巨大隕石の衝突によって文明は滅び、帝国も滅亡してしまったのだから諸行無常とはいったものである。

　巨大隕石の衝突によって古代カロン文明が滅亡したあと、人界は一〇〇〇年に及ぶ大混乱期に突入し、血で血を洗う群雄割拠の時代が到来した。その間に、古代カロン文明が栄えていた土地は魑魅魍魎が蔓延る人外の世界と化して人間を寄せ付けぬ魔境となってしまったようだ。

　歴史上、幾つもの大国が、この暗黒の大地を再開発しようと、大規模な軍隊を派遣したり精鋭部隊を投入したりしてきたが、調査はできても開拓は難しく、人界に取り戻すという試みが成功したことはなかった。棲息する魔物が、あまりにも強かったからだ。

　植物なのに動いて肉を喰らう肉喰植物ベラナドーラ、全身から無数の触手と触腕を生やして蠢く触獣生物ギュナ、この世のモノとは思えない形状をした怪蟲生命体ガゴ、まるで生きた池のように活動する液状粘体菌ミレオン、人や獣に「群れ」で寄生して生きたまま巣とする群体寄生虫カルバレス、硬い地中のなかをものともせず掘り進む巨大環形生物ズズナなど、この暗黒の大地には他ではみられないような魔物や未知の生物が多数棲息しており、人間たちの進出を阻んでいるのであった。

暗黒の大地を領土の一部と主張するランバース帝国は、先人たちに習って再開発の野心にとり憑かれたのだろうか。それとも、再開発など野望せず、調査と探究によって利益のみ追求しようとしているのか。いずれにせよ、ディリクレアほどの重鎮を領主と定めているのだからなにか目的があるに違いなかった。

　そのようなことを考えながらロザリーは、暗黒の大地にもっとも近いディリクレア辺境伯領ニレタの町を出発した。六月一〇日のことである。

　暗黒の大地に踏み入って以降、方位磁石を頼りに、目的地であるカロバの洞窟まで受け取った地図を頼りに進む。暗黒の大地は不毛な土地だ。水気に乏しく、草木もそれほど生えていない。岩や瓦礫が多いのは、巨大隕石の衝突によって大地が荒廃したからだといわれているが、大地の起伏はささやかであったため、進むのにはそれほど苦労はしなかった。

　前進の障害となったのは、襲ってくる魔物たちだった。触獣生物ギュナや怪蟲生命体ガゴなどと遭遇し、戦闘になった。暗黒の大地に棲む魔物たちはやはり桁違いの強さあったが、それだけでなく、生命力まで高かったため、倒すのに手間と時間がかかって仕方がなかった。

「ああ、もうっ！　しつこい！　さっさとくたばりなさいよ、この下等生物がっ！」

戦闘中、そう叫んだことが一度や二度ではなかった。

　魔物たちは、剣で斬っても魔法で攻撃しても、傷ついた身体を再生させながら、あるいは流れる血を完全に無視して、命が尽きて絶命にいたるまでの間、まるで狂ったように牙を剥きながら向かってきたのだ。おそらく、生物として、それほどの気概がなければこの過酷な大地では生きていけないからであろう。

　魔物たちとの戦いに勝つには勝ったが、ロザリーも無傷というわけにはいかなかった。戦闘中、ロザリーは、油断や慢心からではなく、完全に隙や不意を突かれる形で、何度か攻撃を受けてしまったのだ。

　肉体的損傷は回復魔法ですぐに癒えたが、問題は衣服や装備の破損だった。度重なる戦闘により、ロザリーの服は破れ、ズボンも千切れ、下着まで損傷した結果、彼女の姿は全裸よりも恥ずかしい格好に成り果ててしまったのである。より具体的に説明するならば、肩や太腿、股間の割れ目、それに大きな乳房の一部が布地に隠れている以外は、ほぼすべての部位が丸出しの状態になってしまったのだ。

　それこそ、そう――陰毛が生えていない柔らかなマン肉も、肉づきのよい熟れた大きなお尻も、さらには色素が薄い乳輪さえもが、ほとんど露出してしまっているのである。辛うじて「まだ」大事な部分は見えていないが、痴女ですら、こんな惨状では赤面せずにはいられないであろう。当然、ロザリーは、いまの自分の情けない格好を見やって、顔を赤らめながら悪態を吐かずにはいられなかった。

「まったく、もう！　我ながらなんて恥ずかしい格好なのかしら！　おっぱいほとんど丸出しで、お尻なんてもう全部見えちゃっているじゃない！　まったく、なんて最低な状況なのかしらっ！」

なまじスタイルが豊満であるだけに、残った布地だけでは繕っても仕立て直すことは難しい。一応、荷物の中に予備の下着くらいは用意しているが、今後も魔物との激しい戦闘があれば損傷してしまう可能性が高い。さすがに帰還するときに全裸姿では恥ずかしいので、いますぐに着替えることは躊躇われた。かといって、いまの状態では逆に動きにくい。ボロの布切れと化した生地が、身体に張り付いて不快で気持ち悪いのだ。

　ゆえに、ロザリーがとるべき選択肢はひとつだった。

「う～、仕方がない」

ロザリーは決断した。彼女は、すでにボロ切れと化した衣服の残骸を掴むと、ソレを自分で引き千切ったのである。

　ビリッ、ビリビリリ･･････ッ！

布地の残骸が破れる音がして、ロザリーの白い裸体が露になった。彼女は完全に、全裸になったのである。そう、すっぽんぽんだ。平均水準よりも遥かに大きくて豊かな乳房も、色素が薄くて乳輪が大きな薄桃色の乳首も、柔らかなぷにぷにした肉が盛り上がった股間も、小豆のような淫核も、丸みを帯びた肉付きのよい大きなお尻も、なにもかも丸出しの状態になったのである。それも、自らの意思で。

　辛うじて剣を帯びるベルトや魔法の発動を補助するネックレスや腕輪などは残っているものの、恥部を隠す役割を果たす物はなく、前後左右どこから見ても豊満な肉体を鑑賞することができる格好だ。下から覗けば、キュッと締まった肛門も見えてしまうことだろう。むしろ肉体が豊満な分、遠目からでもその裸姿は圧倒的で圧巻だ。

　異性垂涎の豊満な肉体を、野外にて、あますところなく白日に晒したならば、普通は恥ずかしさのあまり赤面して身を縮めずにはいられまい。しかしロザリーは、全裸になったことでどこか満足した様子で、腰に手をあてながら、まるで自分の裸体を誇るように頷いたのだった。

「うん、すっきりした。あんな格好より、いっそ裸になったほうが動きやすいんだから、この方が清々するってもんよ。どうせ他に人なんていないんだから、恥ずかしがるだけ損ってもんよね」

全裸になったことで吹っ切れたのか、それ以降、暗黒の大地を進むロザリーの姿はまことに堂々としたものだった。

ゆっさゆっさゆっさ･･････。

むちっむちっむちっ･･････。

歩くたびに大きく肥大した乳房が揺れ動き、熟れた尻肉がむちむちと上下する。服を着ていた時は身体が汗でベトついていたが、全裸になってからはその不快感から解放された。むしろ白い裸体を撫でる乾いた風が心地よく、言葉では言い表せないような解放感が全身を駆けてゆく。ゾクゾクとして、ロザリーは思わず自分の大きな乳房を強く掴んだ。指が、乳肉の中にめり込む。

「ああ、なんて気持ちがいいのかしら。いままで考えたこともなかったけど、全裸で行動するのって、けっこう気持ちいいなのね」

顔を赤らめつつ、尖った乳首を指でコリコリと弄りながら、もう片方の手で股間の割れ目をくちゅくちゅと嬲る。自慰行為は時々するが、全裸姿で、しかも野外で、歩きながらオナニーをするなど、普段の彼女からは想像できないような行動だったが、もう、止まらない。歩きながら自分の性器を激しく弄る。

「んっ、あんっ、ううん･･････」

ぐちゅくちゅ、ぐぢゅぅぅう･･････。

卑猥な音を立てながら、まるで炙ったチーズのように熱くとろとろになっている雌穴の中を掻き混ぜるロザリー。下半身からの興奮が伝播したのか、乳房が芯から硬くなって乳首が太く勃起した。全裸になったことで本能が解放されてしまったのか、それとも背徳感からだろうか、もしくは吹き付けた風に乗っていた暗黒の大地特有の瘴気の影響によるものだろうか。いずれにせよ、太陽だけがロザリーの痴態を見つめるなか、甘い蜜のような汁が、象牙細工のように美しい指で弄る股間から滴り落ちて乾いた大地に跡をつけていった。まるで蟻のマーキングのように点々と。

　その蜜の香りに誘われてというわけではなかったが、全裸になって以降、カロバの洞窟に到着するまでの間、何度か魔物と遭遇して戦闘になった。が、ロザリーが負けることはなかった。敵の触手が乳房に巻きついたり、あるいは大きな尻をスパイキングされることはあったが、致命傷を負うこともなければましてや魔物たちに犯されることもなかった。むしろ裸姿で戦うことで高揚したのか、ロザリーの戦闘力は目に見えて向上し、衣服を着ていた頃よりも楽に戦いに勝てたのは大きな収穫であった。

「んふふ、他愛ない。もし勝てたら、あたしの身体を存分に犯せたのに。残念ね」

普段なら口にしないような台詞を言いながら、ロザリーは魔物たちの屍体を足で踏みつけて嗤った。一瞬、自分が魔物たちに犯される情景を想像したかもしれないが、それが現実化することはないと確信している。男性との性交はいずれ経験するだろうが、相応しい相手が現れるまでは、誰にも自分の肉体を許すつもりはなかった。

そしてニレタの町を出発してから五日目、彼女はついにカロバの洞窟に辿り着いた。到着するまでの間、自慰行為によって何度か絶頂したか。ただ、そのおかげで性欲が解消されていたので、全裸姿であることを除けば、表面上は、普段の彼女と変わりなかった。

「ここがカロバの洞窟ね、やっと着いた」

岩山の壁に、まるで怪物が口を開けるように大穴が開いており、中を覗くと、まるで深淵世界まで到達していそうなほど奥が深かった。

　その時だ。洞窟の奥から風が抜きぬけてきた。

ゴオォォォー･･････ッッッ。

洞窟の奥から吹き抜けてきた風は、身が凍えるような冷風ではなく、まるで生き物の体温のように生暖かかった。その生暖かい風は、ロザリーの全身を包み込んだ。白い肌を撫でる風の感触は、まるで獣の吐息のようであり、人によっては肌を舐められたかと思ってゾッとすることだろう。生暖かい風を浴びた瞬間、ロザリーの薄桃色の乳首と小さな淫核がツンと勃ったが、それは恐怖からではなく、全裸姿による弊害――すなわち生理的な反射であって、ロザリー自身は恐れも感じなければ怯えてもいなかった。むしろケダモノの獣風を受けてまた興奮してしまったのか、それとも別の要因によってか、ロザリーは無意識に大きな乳房を手で揉みしだきながら、推測を口にした。

「洞窟の風が暖かいのは、この奥にたくさんの生き物がいる証拠。この洞窟は、間違いなくその生き物の巣窟になっているに違いないわ」

その生物こそ、大繁殖しているというジュラゲドであろう。そう確信した瞬間、彼女は自分が無意識に乳房で自慰していることに気づいて、ハッとおっぱいから手を離した。洞窟は未知の宝庫だ。平地と比べて危険度も高い。全裸姿で行動するようになってからというもの、背徳的な解放感ゆえか、本能的な行動を衝動的にとるようになっていたロザリーだったが、さすがに自重すべきと思ったようである。コホンと咳払いをしてから表情を引き締めた。

「さぁ、行くわよ」

ロザリーは決意を新たに、大きな乳房を揺らしながら一歩を踏み出した。そして、自信に満ちた足取りで奥へ奥へと進んでゆく。

　その姿はまるで、怪物に食べられる生け贄にされた女のようであった･･････。

　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。